

---

■ 2022年度前期科目《ジェンダー論入門》 ■

「「闇」から見るジェンダー——森崎和江『まっくら』を読む」

担当教員：村上 潔

2022/08/07 補足資料

---

■ [補足資料] 読書案内——『まっくら』のあとに読むなら……

◆森崎和江 [1963] 2022 『非所有の所有——性と階級覚え書』, 月曜社, 368p.

<http://getsuyosha.jp/product/978-4-86503-143-0/>

—“【説明】『まっくら』以後、筑豊での性と階級が交差する闘いのなかから既成のものにかわる新たなる概念を生み出す格闘の軌跡。初版1963年現代思潮社刊。70年新装版の「あとがき」のほか、資料として「炭鉱の女」（1959-60）「道徳のオバケを退治しよう」（1959）を収録。解題：大畑凜「弁証法の裂け目」”

◆森崎和江 [1970] 2022 『闘いとエロス』, 月曜社, 432p.

<http://getsuyosha.jp/product/978-4-86503-144-7/>

—“【説明】谷川雁との共感と絶望、伴走と訣別を、闘争内の性暴力事件を中心に描き出し、性と組織の困難に切り込む、読み継がれるべき問題作。初版1970年三一書房刊。資料として谷川への追悼文「反語の中へ」（1995）を付す。解題：大畑凜「困難な書」”

◆上野英信 1960 『追われゆく坑夫たち』, 岩波書店（岩波新書青版F-24）, 254p.

<https://www.iwanami.co.jp/book/b267376.html>

<https://www.asahi.com/articles/DA3S15200060.html>

<http://www.arsvi.com/d/2017qasmk.htm#14>

—“【説明】廃坑と眠るボタ山——坑夫たちは失業し、一家は路頭に迷う。筆者は、裸の労働者として生きようという情熱から、京大を中退して炭鉱にとびこみ、採炭夫や掘進夫として筑豊のヤマを転々とした。大資本のクッションとして、常に苛酷な奴隷労働と飢餓生活に苦しめられている絶望的な中小炭鉱の極限状況を追究した異色のドキュメント。”

◆上野英信 1967 『地の底の笑い話』, 岩波書店（岩波新書青版F-23）, 194p.

<https://www.iwanami.co.jp/book/b267375.html>

<http://www.arsvi.com/d/2017qasmk.htm#14>

—“【説明】ボタ山のふもとの納屋生活のあけくれ、また、一秒後の生命の保証もない坑内労働の合いま合いま、折にふれて老坑夫たちの語ってくれた、懐かしい笑い話。“幼い頃から筑豊炭田のあらあらしい脈動をききながら育ち、敗戦後はいくつかのヤマ

で働き、生涯を炭鉱労働者とともに生きたいと願ってきた”著者が生き生きと描き出す労働者像。”

◆石牟礼道子 [1969] 2004 『[新装版] 苦海浄土——わが水俣病』, 講談社 (講談社文庫), 416p.

<https://bookclub.kodansha.co.jp/product?item=0000203535>

<http://www.arsvi.com/d/2017qasmk.htm#15>

<http://www.arsvi.com/d/2018qrmsb.htm>

—“【説明】工場廃水の水銀が引き起こした文明の病・水俣病。この地に育った著者は、患者とその家族の苦しみを自らのものとして、壮絶かつ清冽（せいれつ）な記録を綴った。本作は、世に出て30数年を経たいまなお、極限状況にあっても輝きを失わない人間の尊厳を訴えてやまない。未永く読み継がれるべきくいのちの文学>の新装版。”

\*石牟礼道子 [1969-2004] 2011 『苦海浄土』, 河出書房新社 (池澤夏樹個人編集《世界文学全集》第3集), 780p.

<https://www.kawade.co.jp/np/isbn/9784309709680/>

—“【説明】水俣の不知火海に排出された汚染物質により自然や人間が破壊し尽くされてゆく悲劇を卓越した文学作品に結晶させ、人間とは何かを深く問う、戦後日本文学を代表する傑作。三部作すべて収録。”

\*石牟礼道子：<http://www.arsvi.com/w/im12.htm>

◆林えいだい 1983 『海峡の女たち——関門港沖仲仕の社会史』, 葦書房, 318p.

◆林えいだい 2018 『[写真記録] 関門港の女沖仲仕たち——近代北九州の一風景』, 新評論, 192p.

<http://aragai-info.net>

<https://www.shinhyoron.co.jp/978-4-7948-1086-1.html>

<https://www.chosyu-journal.jp/review/7948>

<https://mainichi.jp/articles/20180415/ddp/014/040/034000c>

—“【説明】福岡県北九州市門司区、関門海峡を望む港に、かつて「女沖仲仕〔おきなかし〕」ないし「女ごんぞう」と呼ばれる女性の港湾労働者たちがいた。本書は、昨秋惜しまれつつ世を去った福岡出身の記録作家・林えいだいが、一九七〇～八〇年代にかけて彼女たちに取材した記録である。機械化が急速に進みだす一九六〇年代まで、貨物船からの荷揚げと荷下ろしは人力に頼っていた。船底の荷を網にすくい入れて甲板に引き揚げ、海上の舢〔はしけ〕へ移す。船中でこの一連の荷役を担うのが沖仲仕である（棧橋に着いた舢から荷を陸揚げする人々は「陸仲仕〔おこなかし〕」と呼ばれた）。関門港の北九州側の門司や若松では、明治期から多くの女性が沖仲仕として働いていた。一八九五年、後日デンマークの婦人参政権運動の主導者となるヨハンネ・ミュンターは、門司で石炭荷役に従事する女沖仲仕の姿に男女平等の理想像を見た。一九六六年に来日したサルトルとボーヴォワールも、彼女らに会いに門司を訪れ、男と全く同じ仕事をこ

なす様子に「世界に類を見ない」と目をみはった。彼女らは男でも音を上げる苛酷な労働に耐え、筑豊炭田と北九州工業地帯の繁栄、ひいては戦後日本の高度経済成長を下支えした。だが六〇年代以降の「エネルギー革命」と技術の進展にともない、やがてうちすてられていく。林が取材したのは、港から消え去る寸前の最後の「女ごんぞう」たちの姿である。心身を酷使し、時に瀕死の重傷を負いながらも、「沖での仕事が生きがい」と語る女たち。林はその強さと威厳、底抜けの明るさに圧倒され、シャッターを切り続けた。「港はもう、彼女たちを呼んではいけない」（林えいだい『海峡の女たち——関門港沖仲仕の社会史』葦書房、一九八三年）。だが、職業意識に徹した誇りと自負、たくましさと開放的な笑顔は、林の手で永遠の命を与えられた。（編集部）”

◆藤本和子 [1983] 2018 『塩を食う女たち——聞書・北米の黒人女性』, 岩波書店 (岩波現代文庫: 文芸303), 270p.

<https://www.iwanami.co.jp/book/b427320.html>

<https://mainichi.jp/articles/20190124/org/00m/040/003000d>

—”【説明】アフリカから連れてこられた黒人女性たちは、いかにして狂気に満ちたアメリカ社会を生き延びてきたのか。公民権運動が一段落した1980年代に、日本からアメリカに移り住んだ著者が、多くの普通の女性たちと語り合った中から紡ぎだした、女たちの歴史的体験、記憶、そして生きるための力。（解説＝池澤夏樹）”

◆藤本和子 [1986] 2020 『ブルースだったただの唄——黒人女性の仕事と生活』, 筑摩書房 (ちくま文庫ふ-54-1), 320p.

<https://www.chikumashobo.co.jp/product/9784480437037/>

—”【説明】1980年代、アメリカに暮らす著者は、黒人女性の聞き書きをしていた。出かけて行って話を聞くのは、刑務所の臨床心理医やテレビ局オーナーなどの働く女たち、街に開かれた刑務所の女たち、アトランタで暮らす104歳の女性…。彼女たちは、黒人や女性に対する差別、困難に遭いながら、仕事をし、考え、話し合い、笑い、生き延びてきた。著者はその話に耳を澄まし、彼女たちの思いを書きとめた。白眉の聞き書きに1篇を増補。”

\*NHKジャーナル 2020 「岸本佐知子さんおすすめ 聞き書きの名著復刊。藤本和子著『ブルースだったただの唄』」, 『NHKジャーナル』2020年12月25日, (<https://www.nhk.or.jp/radio/magazine/article/nhkjournal/AIwkrHVo9s.html>)

\*中村佑子 2021 「[Vogue Book Club] 藤本和子著『ブルースだったただの唄 黒人女性の仕事と生活』を、今、読むべき理由。」, 『Vogue』2021年1月30日, (<https://www.vogue.co.jp/change/article/vogue-book-club-blues-datte-tadano-uta>)

◆茅辺かのう [1984] 2021 『アイヌの世界に生きる』, 筑摩書房 (ちくま文庫か-82-1), 224p.

<https://www.chikumashobo.co.jp/product/9784480437525/>

<https://twitter.com/chikumabunko1/status/1410903877507969024>

<https://www.eaa.c.u-tokyo.ac.jp/blog/20220509-16/>

—“【説明】「トキさん」は1906年、十勝の入植者の子どもとして生まれ、口減らしのため、生後すぐにアイヌの家族へ養女として引き取られた。和人として生まれたが、アイヌの娘として育った彼女が、大切に覚えてきたアイヌの言葉、暮らし。明治末から大正・昭和の戦前戦後を、鋭い感覚と強い自立心でアイヌの人々と共に生き抜いてきた女性の人生を描く優れた聞き書き。”

◆梨木香歩 [2006] 2010 『水辺にて on the water / off the water』, 筑摩書房 (ちくま文庫な-41-1) , 256p.

<https://www.chikumashobo.co.jp/product/9784480427724/>

<https://www.chikumashobo.co.jp/special/water/>

<http://www.arsvi.com/d/2017qasmk.htm#10>

—“【説明】水辺の遊びに、こんなにも心惹かれてしまうのは、これは絶対、アース・ランサムのせいだ——そう語り始められる本書は、カヤックで湖や川に漕ぎ出して感じた世界を、たゆたうように描いたエッセイ。土の匂いや風のそよぎ、虫たちの音。様々な生き物の気配が、発信され受信され、互いに影響しあって流れてゆく。その豊かで孤独な世界は、物語の根源を垣間見せる。”

◆五所純子 2021 『薬 [クスリ] を食う女たち』, 河出書房新社, 240p.

<https://www.kawade.co.jp/np/isbn/9784309228242/>

—“【説明】覚醒剤や大麻、睡眠薬……そして現代を生きる女性たちの身に起こるさまざまな事柄、葛藤し抵抗する姿を丹念に描き、新たな表現へと昇華 (あぶ) る。フィクション/ノンフィクションとは何かを問う《ルポ+文学》の新たな金字塔、ここに誕生。”

\*朝日新聞文化くらし報道部 2021 「五所純子さん「薬を食う女たち」インタビュー 実在する彼女、ルポか小説か」, 『朝日新聞』2021年7月7日→『好書好日』2021年7月10日, (<https://book.asahi.com/article/14390153>)